

## 【聴楽014】近世の女筆手本(1-女筆手本とは)

小泉吉永

## 第1章 女筆と男筆

- ◆「女筆<sup>※1</sup>」＝女性の筆跡、従って「女筆手本」＝「女性が学ぶために女性によって書かれた書道手本」。書名に「女筆」の2字を含むものは例外なく近世の出版であるように、小松茂美氏の指摘<sup>※2</sup>のように「女筆」は近世の用語であろう。
- ◆「女性が学ぶために男性によって書かれた手本」に「女筆○○」という書名を持つ例もあるため、「女筆」＝「女性筆」と断定できない。「女筆」は曖昧に使われ、「女性筆」のほかに、「女性用」の意で用いられることもあった。
- ◆従って女筆手本類は、次の点の検討が必要。

- ①書き手と学び手の性別を峻別する必要がある。「書き手→学び手」と表現すれば、女筆手本類には「女→女」と「男→女」の2通りが考えられる。
- ②純然たる「手本」もあれば、実用的な消息案文集としての「用文章」もある（従来の研究者は、この区別をせず同列に扱うのが常）ため区別すべき。
- ③文章形式の検討の必要。大きく「消息文」と「非消息文」

■本稿で扱う「女筆手本類」の範囲（補注）

		消息文	特殊消息文	非消息文
女筆	①女筆手本	○	○	○
	②女筆用文章	○	○	
	③女筆往来物			○
男筆	④男筆女用手本	○	○	○
	⑤男筆女用文章	○	○	

に大別され、前者はさらに、雅文・俗文の「消息文」と、手紙文形式で諸知識を盛り込んだ「特殊消息文」とに区別できる。後者の「非消息文」は『女今川』などの教訓文が典型。

以上の理由から、本稿では、女筆手本・女筆用文章・女筆往来物・男筆女用手本・男筆女用文章の5類型を扱い、これらを総称する場合に「女筆手本類」という言葉を用いた。

- ◆女筆手本類の題簽には書名に続けて「女筆」と記載したり、書名に「女筆○○」と銘打つものも多い。女筆手本隆盛期によく見られたが、題簽に「女筆」と表示する意味や効果を物語る。江戸中期までは「女筆」の記載は「女性筆」の実質を伴うものだった。「女筆手本類刊行一覧（以下「刊行一覧」）」に掲げた約300点のうち、「女筆○○」の書名を持つものは約60点。その半分は筆者の性別不明、残る約30点中20点強が女筆で、男筆は10点に満たない。題簽に「女筆」と記載した男筆女用手本は万治（1658～61）頃刊『女筆往来』、元禄6年（1693）刊『女筆四季文章』、宝永元年（1704）刊『女筆用 みちしば』、寛延元年（1748）刊『女筆姫小松』、明和5年（1768）刊『女筆早手本』、明和9年（1772）以前刊『女筆浅香山』、天保10年（1839）刊『女筆花鳥文素』の7点。この割合からしても未発見の30点中20点以上は女筆と推定される。さらに、題簽下方に「女筆」と記されたものも例外なく女筆であるから、全体の8～9割以上が女筆であろう。

- ◆江戸中期以後は男筆でも「女筆」としばしば宣伝された。例えば、文化5年（1808）再板<sup>※3</sup>『女撰要国織』には次の広告が見られる。

女筆手引の松<sup>※4</sup> 戸田玄泉堂筆 全一冊

戸田先生の筆にして、四季用文其外女の道に用ゆる文章をあつめ、手ならふ人の手本とす。

同かな文<sup>※5</sup> 長玄海堂筆 全一冊

此書は長先生の筆にしてかん要の文をあつむる事、『手引のまつ』に同じ。このふたつの書を習ふときは、ちらし書の字くはりつゞけやうをしり、能書になる事かたからず。

→ 玄泉堂も玄海堂も多くの往来物を執筆した有名な書家で、彼らが男性であることは読者の多くが認知していたはずだが、それにも関わらず「女筆」の書名で宣伝。ここでは「女筆」を「女性用」という意味で用いている。原本の題簽には『手引のまつ』とあって「女筆」の2字は全く見当たらない<sup>※6</sup>。広告の「女筆」は鵜呑みにはできないが、原本に「女筆」の記載がある場合は、多くの場合、実際に女筆の可能性が高いと考えてよい。

- ◆さて江戸初期には「女性は女性書家の手本を用いるべきである」という主張が大勢を占めていた。元禄5年（1692）刊『女重宝記』（苗村丈伯作）の4巻にも、

一、女中はかりにも男の書たる手本、よき手なりともならひ給ふべからず。男の手をならひたる女筆は、筆だてするどにみへ、文<sup>※7</sup>章も何としても男らしき事間々あるものなり。よき女筆を手本とし給ふべし。…

とあり、「男筆」の手本が女性に不適切なことを説く。ここで言う「女筆」は明らかに「女性筆」の意であり、この文章から想像されるのは、当時既に男筆女用手本がかなり出回っていた状況であろう。

◆現存の女筆手本類では、元禄初年以前に刊行されていた男筆女用手本は万治頃刊の『女筆往来』だけである。原本には筆者の記載がないが、『寛文10年書目』に「中川喜雲作」とある(その筆跡は、万治～寛文(1658～73)頃に多数の往来物を書いた武藤氏に酷似する<sup>\*7</sup>)。いずれにしても、『女筆往来』以外の現存本が全て女筆であることから、江戸初期の一般認識は「女筆」＝「女性筆」であったと考えられる。

◆さて、宝永4年(1707)刊の女筆手本『わかみどり』跋文には、

世間に板行の女筆数多有之といへ共、多くは男筆にて児女之手本に成かたし。

とあり、ここで言う「女筆」には男筆・女筆の双方を含み、さらに、女筆よりも男筆が多かったことになる。だが、宝永4年までに刊行された女筆手本類40点中、女筆20点、男筆6点で、筆者不明の14点もその3分の2以上は女筆と推定されるから、女筆は全体の75%に相当する訳で、『わかみどり』の「多くは男筆にて」の記述は理解に苦しむ。

◆宝永2年(1705)刊『女筆子曰松』の序文に次の指摘がある。

今世のなかに女文の<sup>ねのひのまつ</sup>梓にちりばめたるは、まさごのかずかずに<sup>あづさ</sup>はまちどりの跡ありとみゆれど、<sup>わがくにやまと</sup>我国日本ことばのやさしきはなく、おほくは男の筆をまねびたるゆへにや、<sup>ことば</sup>言葉たくみにてそのさまいやし。いはゞ「つよからぬ女に上下のはかませたるがごとし」と、ある御所かたにうけ給り、それよりこのかた<sup>はた</sup>廿とせあまり女筆の<sup>すぐれ</sup>勝れたるをひろひあつめ…

→ 真に女性らしい言葉遣い・筆跡の女筆手本が消えていきつつある状況、そしてそれを憂える人々がいたことを想起させる。実際に刊行された手本の大半が女筆であったにもかかわらず、「多くは男筆にて」と言わせた背景には、女筆における書風の変化、すなわち女筆の男性化現象があったらしい。

◆男筆手本が女性に不向きなのは、手本の内容、つまり、手紙に用いる言葉遣いが男女で大きく異なるからであったことは言うまでもない。貞享5年(1688)刊『女文章鑑』<sup>\*8</sup>の序文で居初津奈が、

分て女<sup>わき</sup>性の<sup>によしやう</sup>ことば・文章などは、たとひ正<sup>たいしき</sup>言<sup>ことば</sup>にても、男<sup>おとこ</sup>のことばとおんなのことばとのかはりあれば、おとことばをはふみにはかくへからず。

と主張したのも、女筆手本の男性化に対する強い批判であったと理解される。

◆平民出身の女能書、春名須磨も享保20年(1735)刊『女用文章唐錦』頭書「女中手習の指南」で、

真名<sup>まな</sup>かく事もよしとはいへとも、女筆におほくおとこもしをかきましへたるもにくげなり。又、真名<sup>もんじ</sup>の大文字など女のかきたるとて、もてはやすもにくけ也。これらはその人の品<sup>しなぐらい</sup>位にもよるへけれども、おほくは女のわさにはかゝすともありぬへし。

と真名の多用を戒めた。同様の主張は江戸中期までの女筆手本類には多く見られたが、江戸中期後半から江戸後期にかけて、このような意識は薄らいでいったと考えられる。その変化を促進したのは、その頃から急激に出版されるようになった男筆女用文章であった。

◆例えば、天明9年(1789)刊『女文章四季詞鑑』<sup>しきしかがみ</sup>(北尾政美編)は、他書に見られない独特の理念が散見されるが、その一つが仮名文に対する意見である。北尾は、女性が漢字表記を敬遠して仮名文一辺倒になることの弊害を同書の頭書「国尽を習べき事」でこう述べる。

夫、つらつら女子の手ならふ手本を見るに、平かなにて文の受こたへのみなり。尤も左もあるべし。去ながら、国の名、あるひは所<sup>ところ</sup>の名などは、かながきに<sup>あふさか</sup>しては、仮名づかひあしければ其<sup>おほさか</sup>所<sup>そのところ</sup>わからず。

そして、一例として近江国の「逢坂」と摂津国の「大坂」などは仮名書きでは間違いやすいと説く。さらに、同書頭書「苗字の文字を習給ふべき事」でも、

女中の事なれば、物<sup>もの</sup>やはらかなるこそよけれとて、みなひらかなにて書たまへば、其<sup>そのめうじ</sup>苗氏によりはなはだ長し。たとへば、「一柳」と二字にてすむを、「ひとつやなき」と六字にかゝば、巻紙、半紙の手紙などにては苗字はかりかきて名はかれまじ。

と述べ、また、「次郎兵衛」の仮名書き「じろびやうへ」のうち「じ」の濁点を落として「四郎兵衛」と間違えるケースにも触れる。このような場合は、漢字の方が正確かつ簡潔で、無駄がないと言う。北尾の意見は仮名文自体を否定するものではなく、実生活上、当然かつ合理的な提案であった。

◆しかし、このような実用性重視の考え方こそ女筆手本を廃れさせた要因の一つと見なし得るのではないか。優雅さや芸術性を志向する「女筆手本」から、実用性や効率性が重視される「女用文章」への移行は、これらの手本の対象が庶民一般へと広がっていった結果を示すものであろう。世間のニーズは女筆手本よりも女用文章に向けられた。女性が

手軽に参照できる女文の即席案文集、あらゆる状況に対応できる豊富な例文集としての「女用文章」こそが求められた。言い換えれば、「女筆手本」は「女用文章」ほど庶民文化に根を下ろすことができなかったのである。

- ◆女筆手本から女用文章への変化は、別に示した「刊行一覧」や「刊行状況」からも明らかで、女筆が享保期をピークに江戸前期から江戸中期前半まで盛んであったのに対して、宝暦以降は徐々に男筆が優勢に転じ、江戸後期には男筆が圧倒的となる。同時に、女筆手本の減少とは裏腹に、女用文章は急増し、江戸後期には女用文章一色の活況を呈した。
- ◆いずれにしても、女筆手本に代わって主流となった女用文章（その大半が男筆と考えられる）が女性の言語体系を変えていく推進力となったことは重要である。江戸前期と後期の女性の言語生活上の変化について、杉本つとむ氏も漢字・漢語・字音語など漢字の使用頻度が高くなっている点を指摘するが<sup>\*9</sup>、これらを最も促進したのは女用文章を始めとする女子用往来であったと考えられる。それは、江戸前期～中期の女筆手本に比べて、江戸中期～後期の女用文章では漢字の使用割合が各段に高くなっていることから容易に想像できる。
- ◆ところで、安永6年(1777)刊『繁栄往来』(呉陵軒作)巻頭に、江戸中期までの御家流の分流を示す系図を掲げる。安永頃までの主要書流をほぼ網羅するもので次の順に掲げる(括弧内筆者)<sup>\*10</sup>。

大橋重政(長左衛門／1618～1672)

すどう 首藤(俊章・又右衛門／1667～1717)

ほんめ 本目(親信・勝左衛門／1637～1704)

たまき 玉置(喬直・半助／1656～1723)

寺沢(政辰・友太夫／1671～1741)

女 長谷川妙貞(豊・貞・筆海子／1670頃～1755頃\*推定)

石川(信義・勘介・柏山／1665～1732)

馬場(政房・条助・春水／1663～1748)

長雄(耕雲・半左衛門／1688～1749)

篠田(行休・関口金鷄／1685～1763)

上田(素鏡・与五郎／1698～1771)

さやま 猿山(周暁・竜池／?～1792)

この系譜には滝本流・溝口流・百瀬流といった重要な書流が省かれているのに対し、長谷川妙貞が当代を代表する女流書家として掲げられており、当時の書流の認識を示すものとして興味深い。

- ◆片山賢の『寝ぬ夜のすさび』(文政～弘化年間の雑録)中の「御家流の筆者<sup>\*11</sup>」(弘化3年2月に著者が内川氏と雑談した時の記録)にも同様の書流を紹介するが、上記以外に建部流・山本流・丸毛流・森流・屋代流・溝口流を加えたのに対し、妙貞流・石川流の2流を削除している(これは、妙貞流が江戸後期には零落してしまった様子を示唆するが、それは果たして女流書家の消滅を意味したのであろうか)。
- ◆文政4年(1821)刊の『筆道師家人名録(初編)<sup>\*12</sup>』(当時の江戸市中の和様書家の一覧)には、和様の「筆道諸流先生ノ名家」とその流派、住所、師弟関係など多くの情報が分かるが、女流書家の名も多く列挙する。女流書家人数の多い順に並べると次のようになる(漢数字は「女性人数／男女合計人数」を示す)。

御家流 120／375 (32.0%)

菅家支流 6／11 (54.5%)

長雄流 4／24 (16.7%)

百瀬流 2／13 (15.4%)

青蓮院流 1／13 (7.7%)

今井流 1／9 (11.1%)

花形流 1／4 (25.0%)

この数字は江戸時代を通じて栄枯盛衰ではなく、文政4年当時の状況を示すものである。かつては御家流の分流に堂々その名を連ねた「妙貞流」を始め女流書家を始祖とする書流は皆無であるが、平均3割が女性である。小松茂美氏も『さやま乞巧帖』に収録された23人の筆跡中に流祖・猿山周暁の娘2人が含まれることから、「当時、女流層においても、意外に猿山流が人気を呼んだのではなかろうか」と推測するが<sup>\*13</sup>、猿山流に限らず諸流に学ぶ女性は少なくなかったであろう。『近世人名録集成』に収録されている各種文献を見ても、女流書家の記載人数は男性書家に比して絶対的に少ないが、男女の記載割合が江戸後期に極端に低くなっているとは考えにくい。つまり、妙貞以後は際立った女流書家が出なかったものの、筆道を志す女性は増えこそすれ、決して減ることはなく、彼女たちは上記の如き諸流に吸収されていったと考えられる。



## 第2章 女筆手本類の文章

◆女筆手本類の文章をさらに詳しく見ていく。女筆手本類から抽出した次の例文はいずれも新年状である。

## ①元禄(1688～1704)頃刊『女しき文章』 \*見出し・ルビなし。

あらたまりまいらせ候此春よりの御めてたさ、幾千代万代までも替らぬ門の松かさり、ちさともおなし御事といわみ入まいらせ候。[めて度かしく<sup>\*14</sup>]なを〜その御方となたも御息災にて、御としつもの御事とかす〜めて度思ひまいらせ候。めて度かしく

## ②享保20年(1735)刊『見寿乃雪』 \*見出し・ルビなし。

新玉といふはかりにや、明行空の昨日にかはり、大路之さま松たて渡して花やかに、うれしけなる神代之国の久しかるへきためしをと、君と臣との跡たへす、家々の御作法、万の民のすへ〜まで、父子・夫婦之むつましの月、破魔弓・毬打・胡鬼の子之もてはやしをいつくしみ、仁義礼智の筆はしめ、馬のり初、蔵ひらき、一きは心もうきたち、春のけしきこそあめれ、驚の音ものとやかに、垣ね之梅の咲にほふ、四方之山並かすみ渡りて、漸きさらきの末つかた、比良の根おろしさへかゑりて、さくなみのあみ引も、うら〜の呼声伝ふらんとそ、なかめまいらせ候。めて度かしく

お済様 人々御申給へ

## ③宝暦3年(1753)刊『女用章』 \*見出し・ルビなし。読み順を丸付き文字で示す。

つきし候はぬ此春よりの御ことふさいわひ入まいらせ候。其御程様も(かしく<sup>\*15</sup>)皆々様御揃遊はし、御機嫌ともよく、若葉の春に御移りあそはし、めてたく御年式とも御祝遊はし候はん御事と、かす〜めてたさ、こなたともとり〜無事にてとしを迎へまいらせ候。なを〜春に成、よほと長閑に成候へ共、いまた余寒つよくおはしまし候へは、弥御さばりも有せられす候や、うけ給たくそんしまいらせ候。めて度かしく

## ④天和2年(1682)刊『女用文章』 \*見出し「正月につかはす文」。ルビなし。頭書に簡単な語注。

此春よりの御ことふき子日まつも万代と、めてたく申まいらせ候。漸々のきはの梅も咲匂ひ、木つたふ驚のはつねいとしほらしく、庭のおもひとしほ長閑にて、詠にまさる御祝めてたく申まいらせ候。かしく

⑤元禄3年(1690)刊『女書翰初学抄』 \*見出し「正月 初<sup>はしめ</sup>て 遣<sup>つかはす</sup>文之事」。本文に稀にルビ・語注。頭書に詳しい語注等。頭書と本文の対応を丸付き文字で示す。

あら玉の春のめでたさ<sup>いづ</sup>かたもおなじ御事にて、いはみ入まいらせ候。猶ことしよりおぼしめすまゝの御事とたがい〈互<sup>\*16</sup>〉によるこびを申かはし候べく候。めて度かしく

## ⑥寛延2年(1749)刊『女教文海智恵囊』 \*見出し「初春の文」。検索用見出しとして丸付き文字。ルビなし。

朝日影うらゝかにたな引渡す初かすみ、四方になひかぬ里もなく、弓は袋、劔は箱にうちおさまれる君か代は、久しかるへきわたらひや、五十鈴の川のなかれ絶せぬ水尾之国の、いともかしこき御まつりこと、日ひ〜にあらたなる日もなをさらに、新玉りぬるはつ日かけ、天の戸明てうすかすむ、空に神代の春も知られてのとけしな、空井はるかに末とをき、道ある御代や年毎に、家々の御作法、万の民の軒端まで、松立渡して花やかに、年之尾なからひくしめも、ちよに八千代に万代と、尽せぬ御代をいく久敷と、おそれなから祝ことふき候て、めてたく忝存まいらせ候。なを、はるふるき御めてたさの御用とも、御嘉例のことく、御する〜と御勤なされ候御事一入めてたく、うれしさ、いよ〜御息才にて、御にき〜のはるを御むかへ被成、かす〜御めてたさ、こなたにも相かはらすとしかさね、うれしくそんしまいらせ候。めて度かしく

## ⑦天保10年(1839)刊『女筆花鳥文素』 \*見出し「年始に遣す文」。漢字の殆どにルビ。

あらたまりぬる此春の御ことぶき、千里の外までもおなじ御事にいはひ 納<sup>おさめ</sup>まいらせ候。まづ〜其御両親様御はじめ、みな〜様御そろひあそばし、御機嫌よく御としかさねさせられ、御繁昌<sup>はんはんざい</sup>の御こと万々歳、かぎりのう御めでたくそんじあげまいらせ候。こなたいづれも息才に加年いたしまいらせ候。憚<sup>はばかり</sup>ながら、御こゝろ易くおぼしめし下され候べく候。めて度かしく

かへす〜なを春<sup>はる</sup>ふかく申あげ候べく候。かしく

## ⑧万治頃(1658～61)刊『女庭訓』 \*見出しなし。稀にルビや簡単な語注。

としのはしめの御よろこひ、事ふりさふらへとも、つきせぬめてたさにて候。先元 三のはつ子日、めつらしくわか殿らは庭に小松<sup>こまつ</sup>を引うへ、さかゆく千よのはじめのことぶきを、やまともろこしのことの葉につらね、姫君たちはひみな

あそひに心いれて、三尺<sup>しやく</sup>のみつしのたな二よろひより何くれと、とうでたまふ殿<sup>との</sup>づくり、所せきまでまさぐりつゝ、ながき比<sup>ひ</sup>の日もくるいをおしげに見えて候。此ごろに又わかき女<sup>にようばう</sup>房ども、わか木の梅のさかりなる、なみきの花をかけ物にして、楊弓<sup>やうきう</sup>をともしよほし候。されとも、御めにかけ候はずは、むへなき御事におもひたゆたひ候まゝ、そのかたに心いれたるわかき女とも、めしくせられわたりおはしまし候は、待たてまつり候。よろつゝたいめんの時申のぶべく候。あなかしこ

正月五日

中づかさ

侍従のおもと 申させ給へ

⑨延宝6年(1678)刊『四季仮名往来』 \* 見出しなし。漢字の多くにルビ。宛名の後に追伸文。

初春<sup>はつはる</sup>の御ことふき、いく千代<sup>ちよ</sup>よろつ代までもつきし候ましくといわみ入まいらせ候<sup>き</sup>。その御所様にて、上々様はしめ、いよゝゝ御機<sup>き</sup>けん様よく御としかさねさせられ候はんと、めてたく存まいらせ候。さては、冬とし御やくそく申あけまいらせ候通、おほやけことなとりにふれ、御たつね申あけ候はんまゝ、御むつかしなから仰きかされ下され候べく候。はつはつしき御事なから、元<sup>くはんじつ</sup>日を元<sup>くはんざん</sup>三<sup>かとまつ</sup>と申御事、門松のいわれ、若水<sup>わかみづ</sup>をむかへ、七日わかなをいわみ、子の日のあそひ、十五日のあかのかゆ、おなし日左義長<sup>さぎぢやう</sup>をはやし申候御事など、いかやうの事にて候や。品々おほく御苦<sup>ごくらう</sup>勞なから御返事におほせをきかされ下され候は、うれしく思ひまいらせ候べく候。めてたくかしく

正月五日

さる

綾<sup>あや</sup>の小路<sup>こうじ</sup>御つほねにて 誰<sup>も</sup>にても申給へ

返すゝたえゝしくおはしまし候へとも、御目録<sup>もくろく</sup>の通をくりあけまいらせ候。御しうきのしるしはかりにて候。かしく

⑩延宝(1673~81)頃刊『女学仮名往来』 \* 見出しなし。ごく稀にルビ。

あさみとり春たつそらにうくひすの、初音<sup>はつおと</sup>まちつけてきくものから、四方のけしきののとけさ、松のいろそふ御代なれば、風えたをならさず、雨つちくれをうこかさぬ御事とて、ぬうてうも三皇の御代を初音に唱へ、水にすむかはす、木すゑのせみすら、君をいわみ調とてくちすさむ、相坂の山風は諸行無常をつくるとかや、誠にいきとし生るものいつれか心あらさる。我身事はいとけなきよりみやつかへまいらせ、いとまなみの事しけきにまされて、とし月の行衛もしらぬ山賤にひとしくうち過まいらせ候へは、五常のみちをもきかす。ましておほえ山幾野ならねとふみみる事かなはされは、まなふへきすしもなく候。人として人のみちしらねは禽獄<sup>きんじう</sup>にちかしとかや承まいらせ候まゝ、君につかへ、父母につかうまつるへきやうすよりして、をりゝあらまし御かきつけ下され候は、御うれしかるへく候。めてたくかしく

正月三日

院の御所 蘭

錦小路妙智御比丘尼様 参る人々様申給へ

⑪延享4年(1747)刊『女文章都鑑』 \* 見出しなし。稀にルビ。頭書に詳細な注釈。

歳<sup>とし</sup>の始<sup>はじめ</sup>の御ことふき、きのふに替らぬ松風の音も、けふは干とせをよばふかとうたがはれまいらせ候。吉書<sup>きつしよ</sup>はじめには細石<sup>さいし</sup>の歌、文始<sup>ぶんし</sup>には『文しやうのさうし』読納<sup>よみ</sup>候。めてたきふみのしるしまてに『伊勢物語』二冊<sup>いせものがたり</sup>をくりまいらせ候。(めてたくかしく)なをゝ此物語は別して女のもつへき草紙<sup>さうし</sup>にて候よし、伊勢とは男女の物語なるにより名付たるときゝつたへまいらせ候、いかゝにて候哉。その外種々のしなあるよし、きゝまほしく候。かしく

⑫元禄13年(1700)刊『女世話用文章』 \* 見出し「正月遊び云やる世話ぶんしやう」。漢字の殆どにルビ。

此春<sup>このはる</sup>は賑<sup>にぎにぎしく</sup>敷心<sup>ひる</sup>うきたち、昼<sup>ひる</sup>は軾<sup>や</sup>羽子<sup>はご</sup>、夜<sup>よる</sup>は宝引<sup>ほうひき</sup>にて日を饅<sup>ひ</sup>まいらせ候。終松も言旧く、夕<sup>ひ</sup>もしも三更<sup>ついまつ</sup>過<sup>ま</sup>て突鼻<sup>ゆび</sup>と鬨<sup>とつひ</sup>闘<sup>よなかすぎ</sup>居まいらせ候て、今朝<sup>けさ</sup>は朝寝<sup>あさね</sup>いたしまし候。かしく

以上12本は女筆手本類の諸類型の例だが、これらを、筆者、形態、内容、用語・文体、書法の5点から概観してみる。

【筆者】12本の大半が女筆。男筆は⑦、⑨の2本。⑩は筆者の性別不明。

【形態】12本は全て消息文(特殊消息文を含む)だが、頭書・目次・見出しを付けない「手本」タイプと、頭書・目次・見出しを備えた実用案文集たる「用文章」タイプに大別できる。

◆「手本」と「用文章」には次の相違点が見られる。

- ①「手本」がしばしば大字・無訓の純然たる手習い手本であるのに対して、「用文章」は比較的に小さい字で、読みを付す手本・読本兼用のものが多い。
- ②前者は大字であるため収録書状数が限られ、また、例文の種類がそれほど問題とされないのに対して、後者はより多くの例文が各丁に盛り込まれ、例文の多彩さや表現のバリエーションが重視される。

- ③前者では例文の配列や目次、すなわち検索の便がほとんど考慮されないのに対して、後者では例文が季節順・内容順・見出し語のイロハ順など一定の順序で並べられ、多くの場合目次を付す。
- ④前者は本文主体で付録記事は豊富ではないが、後者は書簡用語・書簡作法に関する記事やその他の記事を付録することが多い。
- ⑤前者を特徴づけるものが「散らし書き」や雅文(厳密には雅語を多用した女文)であるのに対して、後者を象徴するものは用件中心の手紙模範文であり、その表記も実用的な「並べ書き」である。

◆以上はあくまでも相対的な傾向で、実際には「手本」と「用文章」の双方の特色を併せ持つ女筆手本類も存在する。12本を主たる特徴によって区別すると、①～③、⑧～⑩が「手本」、④～⑦、⑪、⑫が「用文章」となる。両タイプが普及した時期と筆者の性別には一定の関連が見られ、「手本」は江戸中期前半以前に隆盛し、その多くが女筆であったのに対して、「用文章」は江戸中期後半以降に続々登場し、そのほとんどが男筆である。

【内容】新年状12例だけでも、書簡形式と本文内容から一定の分類が可能である。まず書簡形式だが、どの例文も冒頭の挨拶語(端作)から書止語、あるいは主文のほかに追伸文<sup>\*18</sup>を含む点で共通する。他方、日付・差出人・宛名人・脇付等を付すものは②、⑧～⑩の4点で、脇付の敬意の強い順に並べると、「参る人々申給へ」「誰にても申給へ」「人々御申給へ」「申させ給へ」となる。脇付は書簡における重要な待遇表現で、本来、貴人宛てに限って用いたが、近世では庶民にも普及したため、脇付の有無よりも、脇付の種類で敬意の上下を区別するようになった。また宛名に「殿」ではなく「様」を付けるが、近世では「殿」よりも「様」の方が上位であり、明らかに身分が違う者同士の間では両者を使い分けるべきと当時の女性書札礼は推奨している<sup>\*19</sup>。また、女性の手紙には日付を書かないのが原則だが、遠方への手紙や重要用件の手紙には日付を記した。

次に本文内容だが、一見同様に見える12の例文のうち、⑧～⑪は消息文そのものの学習というより、諸知識・諸心得の習得に重点が置かれている。いわば、消息文と同時に特定の知識や心得を習得するための手本類であり、「特殊消息文」と呼ぶべきものである。具体的には、⑧、⑨は年中行事や故実、⑩は女子教訓、⑪古典文学に題材を求めた例文で全編が貫かれている。このように、消息文に語彙集団を挟んだり、諸知識・心得を含む方法は往来物特有の文体で、これらの特殊消息文はそのまま実際の書簡文として通用するものから、文頭・文末を除く本文の大半が単語の列挙で実用案文として機能しないものまで様々である。

【用語・文体】②、⑥、⑧、⑩は雅語や形容句を多く含む。例えば、②は用件らしい用件を含まず、めでたさを祝い、新春の風月を愛でる美辞麗句の羅列であり、実用には程遠い。逆に、⑦は「加年」といった字音を用いていかにも男性的な印象を受け、全体的に雅言が乏しく表現が直接的である。概して、女筆手本には②のような風雅尊重・実用排除の傾向が見られるが、特に江戸前期～中期の「女筆手本」は雅文中心で、江戸中期～後期の「女用文章」になると雅語を必要以上に含まない実用文が中心となる。そして、この傾向は女性筆者から男性筆者への変化と重なり合う。なお、⑫は俗語(世話字)で綴った特異な女用文章で、女筆手本類ではこのような俗文は珍しい。いずれにしても、雅語や婉曲表現、文字詞、言い回しなどをさらに詳細に検討することで、手紙の差出人と宛名人との上下関係、身分や年齢などが明確になるであろうが、ここでは2、3の指摘にとどめておく。

なお、近世の消息文は、女文・雅文・俗文・尺牘<sup>せきとく</sup>の4つに分けることができる<sup>\*20</sup>。それぞれ主要な特色は表の通りである。このうち女筆手本類のほとんど全てが「女文」であるが、『月なみ消息』のように一部例外的に「雅文」に属するものもある。

【書法】女筆手本類の書法には、「散らし書き」と「並べ書き<sup>\*21</sup>」の2つがあり、「手本」タイプには前者が多く、「用文章」タイプには後者が多い。先に掲げた12例で言えば、ほぼ全文が「散らし書き」の手本は、①～④、⑥、⑪、⑫の7例で、⑦～⑩の4点は全文が「並べ書き」、

残る⑤は両者が半々<sup>\*22</sup>である。図版でも明らかなように、「散らし書き」とは語句や文節をある一定の規則(文字の大小や配置)によって散らして書く方法である。「散らし書き」については第3章で詳しく検討する。

■近世消息文の主要類型と特色(補注)

	尺牘	俗文(さとしふみ)	雅文(みやびふみ)	女文
性別	男性	男性	男性・女性	女性
文体	漢文体	準漢文体	和文体	和文体
文末表現	侍り・候を使わない	候文	侍り文	まいらせ候文
主たる用語	漢語	漢語(俗語)	和語(雅語)	和語(雅語)・俗語
書物名称	尺牘文例集	用文章	雅文消息集	女筆手本類



### 第3章 異色の女筆手本類

◆上述の女筆手本類のうち⑧～⑫は内容面から特殊な消息文であるが、文章形態と内容から次のように分類できる。参考までに先の①～⑫も入れておく。

#### ◎消息文

- ①消息……(a)雅語を多く含む女文 \*①～⑦を始め女筆手本類の大半。  
(b)俗語を多く含む女文 \*⑫『女世話用文章』が唯一の例。

#### ◎特殊消息文

- ⑧地理……名所などを綴った女文 \*『わかみどり(上巻)\*<sup>23</sup>』『女筆初瀬川』『女筆<sup>あしまのつる</sup>芦間鶴』など。  
⑨社会……年中行事に関する女文 \*⑧『女庭訓』、⑨『四季仮名往来』のほか、『女筆四季文章』『浅香山』『さゝれ石(下巻)\*<sup>24</sup>』など。  
⑩教訓……教訓に関する女文 \*⑩『女学仮名往来』など。  
⑪古典……古典に関する女文 \*⑪『女文章都織』が唯一の例。

#### ◎非消息文

- ⑬地理……地理に関する仮名文 \*『近江八景』など。  
⑭教訓……(a)壁書式の教訓 \*『女今川\*<sup>25</sup>』『女実語教・女童子教』など。  
(b)壁書以外の教訓文 \*『女教訓文章』『女五常訓』など。

◆このように見てくると、当時、一般の往来物に多く見られた諸分野<sup>\*26</sup>、すなわち語彙・消息・教訓・歴史・地理・産業・社会のうち女筆手本類に全く見られない分野は語彙・歴史・産業であることが分かる。一般の女子用往来も同様で、これらの分野に該当するものは極めてわずかである<sup>\*27</sup>。次に、この中から異色の女筆手本類5点を紹介する。

#### ○元禄13年(1700)刊『女世話用文章』

本書は言葉遣いの特異さからいって類書中随一である。作者・前田さわは本書の独自性を自序にこう述べている。

夫、世に女筆用文章数多有といへ共、其章句大形替事なく、めつらしからず。今、此「世話用文章」は章句めつらしく、其上、女の井がたき難字を加へ、女子の助に頼し畢。此文章をよく一習練の上は、万字疎かるまじきとかへす一思ひまいらせ候。かしこ

元禄十三年庚辰歳五月吉日

前田氏息女 さわ筆

従来のありきたりな女筆手本類とは違って、本書は未曾有のユニークさを持つという彼女の自負が感じられるが、同時に、男性が世上用いる俗語を女性も一通り理解しておくべきであるという主張も読みとれる。本書は3巻3冊で、現在のところ、3巻揃っているのは弘前市立図書館本のみである<sup>\*28</sup>。全文が世俗諸般の事柄を綴った俗文で、その異色さは目次にも明瞭である。例えば、上巻部分には(丸付き数字は筆者)、

- |                      |                       |
|----------------------|-----------------------|
| ①正月遊び云やる世話ぶんしやう井返事   | ②伊勢ぬけ参りの事云やるせわ文井返事    |
| ③御物師屋にやるせわぶんしやう井返事   | ④うせ物ざんみにたのみきたるふみ井返事   |
| ⑤酒の酔に行合、迷惑せし事云やる文井返事 | ⑥花見に出、悪口にあいたる事云やる文井返事 |
| ⑦芝居見物に行し事いひやるふみ井返事   | ⑧兄の事そしりいひやるふみ井返事      |

の8題往復16通の例文を載せる。①の往状は既に紹介したように、正月早々夜中まで口論したために朝寝坊したという例文で、その返事には朝から晩まで賭事のカルタ勝負をしたというものだし、②は3年前の「抜け参り」が忘れられないと回想する往復文である。③は適当な裁縫師を紹介してほしいという手紙、④は失せ物の件で容疑者を調べてほしいと頼む手紙、⑤は酔っぱらった若者に追い回されたという手紙、⑥は花見の際に酒宴の連中から散々に冷やかされて恥ずかしい思いをしたという手紙、⑦は流行の歌舞伎芝居を見に行ったら、色事ばかりでちっとも面白くなかったと知らせる手紙である。そして⑧は、女性同士で自らの兄を批評し合う、次のような手紙である。

私 兄さま無人星、仮染の事も短、大語にしかられ、何莞爾と優き事なく、常住白眼つけ、姦敷申されさるとは、瘦はてまいらせ候。内とのものまで私言譏、きのとくに思ひくらしまいらせ候。

その返事も「うちだって同じですよ」と同様の口調である。

このほう かに かはること ごうぎ わがまゝ しわざいた いもうと むま かな うつくしう かへつてこうさん  
 此方の兄様も 変 事なく強義に候て、自在な所行致され候へとも、妹 に生れし悲しさは、可 愛あいしらい、却 降参  
 いたしくしまいらせ候。何方もみな何不寄同事に候。「兄 弟は他人のはしまり」と世話にはよく申まいらせ候。

このような手紙も実際に書かれたのであろうが、少なくとも女筆手本類では例外中の例外である。友達同士で兄を批判することは当時の規範から全く逸脱するものであり、模範例文集になじまない。他の例文も全て規範性を払拭した文面だが、このように率直であからさまな感情表現を例文に含ませた前田さわの意識には興味深いものがある。そこには、旧習や伝統にとらわれず、自我を前面に出す女性の姿がある。

- ◆『女世話用文章』には、異色の例文ばかりが集められており、上巻には先の16通、中巻には「娘 まよひ子に成し事しらせやる文井返事」「かたびら染もやうたのみにやる文井返事」など18通、下巻には「加茂の競馬見物に行し事云やる文井返事」「お物師紅たち損ないし事云やる文井返事」など14通の合計48通からなる。例文中に含まれる世話字(俗語)が多く共通すること、また似通った題材もいくつかあることなどから、『女世話用文章』は元禄5年(1692)刊『世話用文章』<sup>\*29</sup>の影響を受けていることは確実である。しかし、『女世話用文章』と『世話用文章』との関連性は意外なほど少なく、それが単なる模倣でなかったことは中野節子氏が述べる通りである<sup>\*30</sup>。

両者の書状内容の共通性は、先の引用例を除いてあまりみえない。他の文章はいわゆる世話物ということで、芝居見物、宴会のこと、奉公人の苦情、子供の成長など、取り扱うテーマに近いものがあるという以外は、その内容も当時の性による関心の違いを表している。そして、この点は『女世話文章大成』が『世話用文章』の影響で作られたことを否定するものではなく、むしろ、『世話用文章』の刊行というきっかけが与えられるだけで、女性独自のものを作り出す程、当時の女性文化が十分展開していたことを示している。

- ◆このように、『世話用文章』のアイデアを女用文章に導入し、当時の女性には非常識とされたような状況や題材を設定して独自の女用文章を編集して、堂々と自らの名乗りをあげた編者が紛れもなく女性であったことは、注目すべき事実であろう。つい半世紀前までは女性が自らの著作に名前を出すことも憚られた時代であった。いや、江戸前期の女訓書では男性の著作ですら匿名にする場合が多かったのである。しかし、女筆手本類では比較的早くから女性の署名が見られ、特に元禄期には女性の署名は一般化していた。例えば、居初津奈も元禄期に活躍した女流書家だが、彼女の生存中の著作にはほとんど例外なく自署がされている。それ一つをとっても半世紀という時代差が感じられるが、それにも増して『女世話用文章』には露骨に物言う女性の姿を正当化する心理が強く働いている。それは前田さわの強烈な自己主張にほかならず、居初津奈が標榜したような「女性らしさ」への復帰とは全く別種のものであった。
- ◆現存点数が極めて少ないことからしても、『女世話用文章』の出版点数が特別多かったとは考えにくい。そして、後続の類本も生まなかった点でも時代を動かす「うねり」とはなり得なかった。それは、女筆手本類の本流からすれば微々たる支流でしかなかった。しかし『女世話用文章』は、中野氏が述べるように「女性が自らの手で、女性文化の伝統を突き破って行く動き」<sup>\*31</sup>が明らかに存在したことを示す貴重な資料であることに変わりはない。
- ◆また本書は、準漢文体の『世話用文章』中の世話字を和文体の女用文章に移植したようなものであるから<sup>\*32</sup>、漢字の使用が多くなるのはある意味で当然であるが、中野氏の指摘のように、そこに庶民女性における「漢字習得の要求」を見出すことも可能であろう。もう一度さわの序文に立ち返ってみよう。「章句めつらしく、其上、女の弁がたき難字」を多く採り入れた『女世話用文章』を習練すれば、あらゆる字(言葉)に通じることができるというのである。語彙の点から見た『女世話用文章』と『世話用文章』の違いは、世話字の語注や世話字集の有無にある。『世話用文章』の語注は語意のみでなく、由来や出典、別の漢字表記などにも言及しており、下巻「世話字節用集」は一巻まるまる世話字集である。これに対して『女世話用文章』には例文中に世話字が含まれるのみで、個々の世話字の説明には全く関心が払われていない。一つ一つの世話字を十分理解しなくても文脈から大概は理解できるから、個々の世話字の注釈を不要としたのかもしれない。要するに、『女世話用文章』は世話字の大雑把な理解を目論んでおり、『世話用文章』のような語彙へのこだわりはなかったのである。

## ○宝暦12年(1762)刊『女筆初瀬川』

本書は、1通の女文の中に各地の名所・名物を織り込みながら日本68カ国の国名を京都・畿内より順に羅列した一種の地理科往来である。本文は、前から斜めに読んでいく雁行形式のシンプルな散らし書きである。

(かねて) 兼而より示し合せし日の本六十余州国めぐりの御事、思ひ立日を吉日と御定め候て、遠からぬうち 思しめし、御立候べく候。道法の御事は、まつ五畿内、山城・大和・河内・和泉・摂津の国、これらは名所も多候へは、日数をこめ候て、心の



まに(ゆるゆる)に緩々と尋めくり、それより東海道・伊賀の国・伊勢(しばらく)に暫逗留し、内外の御神、天の岩戸、百二十末社残らすふし  
おかみ…

- ◆知人に宛てた1通の手紙文を装って、諸国の国名・名所・名物などを列挙する。具体的には次の名所・名物を紹介する。  
五畿内…「名所も多候へは、日数をこめ候て、心のまに緩々と尋めくり…」

東海道…「(伊勢)内外の御神、天の岩戸、百二十末社」「古市の芝居」「名護屋の御城」「熱田の明神」「(三河)八橋」  
「(駿河)宇都(うつ)(宇津)の山辺」「富士の高根」「三嶋の明神」「箱根の権現」「武蔵鐙」「浅草の観世音」「東叡山」「増上寺」「目黒の不動」「根津権現」「山王の御やしる」「隅田川」

東山道…「浅間の嶽」「木曾のかけ橋」「更科の月」「善光寺」「日光山・東照宮」「陸奥の忍ふもちすり」

北陸道…「名におふこし路とて、雪ふかく積る国にて…」

山陰道…「大江山」「天のはし立」「切渡の文珠」「由良の湊」「(出雲)大社」

山陽道…「(須磨)あかしの月」「安芸の宮嶋」

南海道…「紀伊の国・和歌の浦の片男波」「熊野の浦」「阿波の鳴門」「(讃岐)志渡の浦」「海土の古塚」「八嶋」

西海道…「(肥前)松浦」「長崎」

以上のような順路で日本全国を歴訪する旅の計画を述べた後で、「はやー思しめし御立候べく候。めて度かしく」と結ぶ。このように、本書は消息例文としての機能を持たず、あくまでも地理的教養が主眼の手本であった。

- ◆天明9年(1789)刊『女文章四季詞鑑』の頭書「国尽くにつくしを習ならふべき事こと」には、既に紹介したように女性も地名を漢字で覚えるべきことのほかに、基本的な地名学習について次のように説く。

町屋の家名、また御大名様がたの御受領、御国名を読おぼゆれば、我身一わがみいつしやう生の徳なり。たとひ、眉目かたちはあしくとも、字を能じしりて物の本などすら一よみと読玉ふ女中はおくゆかしきものなりと、むかしより人の譽ほむる所ところなり。

女性用の国尽型往来は、以後、安永2年(1773)刊『女文国尽』、寛政5年(1793)刊『女文章国尽』、寛政12年(1800)刊『国尽女文章』、嘉永2年(1849)刊『女婚礼国尽』など種々編まれたが、『女筆初瀬川』はその最初のものであった。江戸中期に及んで、女性にも最小限の地理的教養が求められるようになったことを如実に示すものであろう。

- ◆本書末尾に「洛陽 長谷川女書」とあるが、この筆者は実際に長谷川氏を名乗る人物の署名か、あるいは長谷川妙躰の人氣にあやかろうとしたための偽装かは不明である(恐らく後者か)。とにかく妙躰風を装っているようだが、妙躰とは似ても似つかぬ筆跡である。

## ○万治(1658～61)頃刊『女庭訓』

本書は江戸中・後期にかなりの普及を見た女子用往来「女庭訓往来」の初板本(3巻3冊)で、『女初学文章』の筆者・窪田やすが執筆した女筆手本である。初板本には刊年を記さないが、『万治2年書目』に登場するのでそれ以前の刊行であることが知られる。初板本の原題簽には「女庭訓 女筆」とあり、首題には「女庭訓往来」と記す。上巻には1～4月、中巻には5～8月、下巻には9～12月の女消息文を配し、各月往復2通で合計24通を収録する。各消息文は女文の学習に役立つものではあるが、実用の消息例文というよりは、年中行事の故実を始め、女性の言葉遣いや心得などに重点が置かれた一種の教養書であって、一般の女用文章とは異質のものである。

- ◆各月の主題を列挙してみよう。

1月状は、宮中の正月風景や行事について述べた後で楊弓の会を案内する手紙とその返状。

2月状は、東山の花見の誘引状とその返状。

3月往状は、任国に赴く道中について問う手紙で、その返状に栗田山から関の藤川までの名所旧跡をかなりの長文で紹介する<sup>\*33</sup>。

4月往状は、女性の道について教示を求める手紙で、その返状で「四徳(婦徳・婦容・婦言・婦功)」などについて詳述する。

5月状は、端午の節句祝儀状で、特に御厨子・黒棚の飾り方についての問答。

以下、6月状は祇園会、7月状は乞巧きこう宴、8月状は八朔祝儀と秋の極楽寺参詣、9月状は重陽の節句と庚申待ち、10月状は猪子の祝儀と女性の心映え、11月状は新嘗祭、12月状は着物の染め色などを主題とした消息文である。いずれも往状で問い、返状で答える形式のため、多くの場合、往状よりも返状が長文である。

このように本書は、女文形式で女性に必要な教養や心得を授けるための手本であった。なお本文中の任意の語句に

細字の略注を施すのも特徴の一つであろう<sup>\*34</sup>。

- ◆「女庭訓往来」は本書を嚆矢として江戸中・後期にかなり普及したものだだったが、女筆手本と見なせるのはこの初板本のみで、その後の流布本は筆者(書家)不明のものが多い。中でも頭書・前付など種々の記事と挿絵を増補した享保2年(1717)刊『女庭訓御所文庫』は、明和4年(1767)・寛政2年(1790)・文化14年(1817)・天保6年(1835)・天保7年(1836)・慶応2年(1866)と何度も版を重ね、本往来の普及を促進した。ただ、「女庭訓往来」には作者名を明記したものが全くなき、また、それを明らかにした文献もほとんどないため、作者不明と考える研究者が少なくないようである(補注)。原本に記載がないので無理からぬことだが、『寛文10年書籍目録』の「廿五、女書」項に次のように記載されている(補注)。

三冊 女庭訓 一花堂作 大津のやす女筆

三冊 女初学文章 右之作 右之筆

このことから、一花(華)堂と窪田やすの2人は『女庭訓』と『女初学文章』の2作品に関わったことが分かる。『女庭訓』には跋文がないが、幸い、『女初学文章』には次のような跋文がある。

此『女初学文章』、都にはよろしき女筆あまたおはしますへければ、其憚おほかれと、いなみかたき仰により、うつしまいらせ侍のみ。

江州大津住 窪田宗保  
息女 やす

万治三庚子年六月吉辰 板行

- ◆この刊記部分に京都・丸屋源兵衛の名を記した一本もある。この丸屋源兵衛は『女庭訓』の板元でもあったことが、『元禄9年書目』からも察せられる<sup>\*35</sup>。ちなみに、本書目には価格も表示されており、『女初学文章』3冊(計67丁)が1匁7分、『女庭訓』3冊(計102丁)が2匁7分となっている。平成7年度米価を基準に計算すると(補注)、『女初学文章』が約2500円、『女庭訓』が約3900円程度である。両者ともに挿絵や頭書を一切含まない純粋な手本だが、1丁あたりの価格は前者が0.025匁、後者が0.026匁となり、ほぼ丁数に応じた価格となっていることが分かる。0.001匁の差はわずかだが、その差は恐らく『女庭訓』本文の数力所に付けられた略注を反映したものと考えられるから、当時の価格設定はかなり厳密であったと言うべきであろう<sup>\*36</sup>。

- ◆筆者の「大津のやす」は、大津に住む窪田宗保の息女という以外は未詳だが、『寛文10年書目』中に登場する女性名は彼女と小野通くらいであるから、江戸前期を代表する女性文化人の一人と見なしてよからう。実は、この窪田家は女筆を輩出した一家であって、貞享4年(1687)刊『女今川』にも『女初学文章』とほとんど同じ跋文を付し、末尾に「江州大津住 窪田宗保ノ孫 つな筆」と署名する。すなわち、やすが『女初学文章』『女庭訓』を書いてから約25年後に、宗保の孫にあたる窪田つなが『女今川』初板本の版下を書いているのである。そして、さらに数十年を経て、窪田津留<sup>つる</sup>という女性が『女今川姫鑑』を書いていることが『女学範』等により明らかである。『女学範』は津留を大津の人とするから、この窪田宗保の曾孫にあたる女性と考えられる。『享保14年書目』に「女今川姫鑑 窪田つる」とあり、『正徳5年書目』にはその書名は見えないので、『女今川姫鑑』は享保(1716～36)頃の刊行と思われるが、それは『女初学文章』の約60年後にあたる。従って、窪田家は津留を含めて3代にわたって著名な女流書家が続いた家柄だったのである。

また、一花堂の著作は上記のほかに、『伊勢物語集註』『大和物語(頭書)』『源氏并引抄』などが『寛文10年書目』に見える。当時としては作品数が比較的多く、万治～寛文頃に京都で活躍した歌人・文筆家だが、彼については天保3年(1832)刊『続諸家人物誌』に詳しいので全文を引いておく<sup>\*37</sup>。

和田一華堂

名ハ以悦、字ハ宗翁、一華堂ト号ス。京ノ人。和歌ヲヨクシ、典故ヲ松永貞徳ニ受、儒学ヲ藤惺窩ニウク。嵯峨広沢ニ隠居シテ仕ヲ好マズ。延宝中歳七十二ニシテ歿ス。弟宗允、字子成ハ儒ヲ以テ聞ユ。著述、大和物語集註・伊勢物語集註・源氏綱目・源氏辨引抄・藤河百首抄・堀河百首抄・童子訓・女庭訓。

## ○延宝(1673～81)頃刊『女学仮名往来』

本書は極めて伝本が少ない稀覯本である。全3巻3冊の完本は謙堂文庫にのみ所蔵するが、石川謙氏はかつて「四季仮名往来」の仮題を付けられた。その原本を見ると、上・下巻には題簽がなく、中巻の題簽の残存部分に「○○仮名○○」とあり、第2文字目の下部が「子」と読み、本文内容が1年12カ月の女文であることから、「四季仮名往来」の仮称を付けたのであろう。それはある意味で妥当であったが、本書のほかに「四季仮名往来」の題簽を有する別の往来物が

存在する点は、私の若干の疑問であった。それは題簽に「新板 四季仮名往来」の書名を持つ3巻3冊本で、延宝頃にいくつかの手本を手掛けた置散子の作である。板種には、延宝6年(1678)吉田屋喜左衛門板、同年井筒屋三右衛門板、延宝7年井筒屋板、無刊記板などがあり、再板本には「再板 仮名往来」の題簽を付けたものもあり、こちらはかなりの流布を見た。ところがその後の調査により、『女学仮名往来』3冊本の存在をしり、これこそが問題の往来物ではないかと直感し、『国書総目録』で唯一の所蔵機関である弘前市立図書館から原本のコピーを入手したところ、やはり謙堂文庫本と同じものであった。弘前本は上・中巻のみで下巻を欠くが、幸い「新板 女学仮名往来」という原題簽が残っており、本書の正式名称を確認し得たわけである。改めて『四季仮名往来』と『女学仮名往来』の双方を比べてみると、題簽・本文の書体はよく似通っており、内容的にも『女学仮名往来』と同じ「綾小路」の小路名が用いられている点、また、両書とも延宝頃に京都で刊行されている点など、同一人作ではないかと思えるほどである。いや、これらの共通点に対して、同人作を否定し得る根拠はほとんどないのである。

- ◆『女学仮名往来』が書籍目録に初めて登場するのは『天和3年書目』からで、この書目は『延宝3年書目』に増補改訂を加えた書目である。『延宝3年書目』には『女学仮名往来』の書名は見えないから、その刊行年代は一応延宝3年(1675)以降、天和3年(1683)以前の約10年間と推定できよう。本書では一応延宝頃としておく。
- ◆本書は、蘭と妙智、または蘭と綾小路住の女性などの間で交わす四季消息文の形で、女子一生の教訓を述べた往来である。手紙文そのものよりも特定内容(女子教訓)の学習に重点が置かれているのが特徴である。蘭を中心に据え、彼女が数人の女性とやりとりする手紙文を毎月1通ずつ、合計12通を収録する。例文に差出人名が付記されているのは1月状のみだが、常に奇数月は蘭が書いた書状(往状)で、偶数月は蘭宛てに出された返状という関係になっていることが文面と宛名人の記述から明らかである。そしてこの差出人と宛名人の関係に注目すると、興味深い点が浮かび上がってくる。まずはその関係を書き出してみよう。なお、×印は無記載を、また[ ]は脇付を示す。

- 1月状 蘭 → 錦小路妙智御比丘尼様[参る人々申給へ]①
- 2月状 × → 御蘭御かた[御返事]③
- 3月状 × → 綾小路にて[人々申給へ]②
- 4月状 × → 御蘭様[御返事]③
- 5月状 × → 綾小路にて[人々申給へ]②
- 6月状 × → おらん御かた[参る御返事]②または③
- 7月状 × → しん上 御比丘尼様[参る]①
- 8月状 × → ×[御返事 参る]②または③
- 9月状 × → 錦小路にて[人々申給へ]②
- 10月状 × → ×[御返事参る申給へ]①または②
- 11月状 × → 錦小路にて[人々申給へ]②
- 12月状 × → × ? \*38

以上12通を見ると、蘭宛ての返状を除いた6通(奇数月の手紙)にはほとんど相手の名前を明示せずに「錦小路」または「綾小路」といった「こうじち小路名」が使われている。これは古くから京都の公家方で行われた伝統的な書簡作法の一つで、手紙の宛名に貴人の名前を直接書くことが無礼とされたため、名前に代えて住所を示したことが習慣となったものである。「錦小路」と「綾小路」は、京都の中央を東西に走る四条大路の両側に平行する小路で、四条大路を挟む形で北側が「錦小路」、南側が「綾小路」である。要するにそのあたりに住む貴人ということになる。このように京都ならではの小路名を使用する点からも、作者が京都人(恐らく女性)であり、京都で出版されたと推定されるのである\*39。もう一つのポイントは脇付である。ただし、7月状の1通だけに上あげどころ所\*40の「進上」が使われている。この進上書きは特別な敬意を払う場合の言葉だから、7月状は12通の中では最高の格式といえる。末尾の①～③の数字は、敬意の違いを示すために仮に付けたもので、①が上輩、②が同輩、③が下輩に使われる表現である。『女学仮名往来』の作者はこれらの言葉を意図的に使い分けており、各例文の宛所・脇付・上所から、蘭の手紙の相手として次の三者が想定されるのである。

- ①錦小路に住む妙智という比丘尼。蘭が最も敬意を払っている女性。\*1・2・7・8月状
- ②錦小路に住む女性(妙智に仕える者であろう)。蘭と同輩か、蘭よりもやや下位。\*9～12月状
- ③綾小路に住む女性。蘭よりはやや上位。\*3～6月状



蘭自身の身分は、1月状に「我身事は、いとけなきよりみやつかへまいらせ、いとまなみの事しけきにまされて…」とあり、差出人名に「院の御所 蘭」と記すように、上皇や法皇の御所に長年奉公する女性という設定である。彼女たちは言うまでもなく架空の存在である。しかし本書の作者は、単純ながらある種の人物像をイメージしており、書簡作法上は矛盾のない人間関係が保たれている。しかしその一方で、蘭が段階を踏みながら学んでいくストーリー性を重視した結果であろうが、蘭に対して3人の女性がそれぞれどのような教訓を述べたかについては整合性を欠く部分がある。つまり、ここでは蘭が3人の女性との文通を通じて女性としての心得を学んでいくという筋書が重要なのである。

◆各状の前半部は相手の手紙に対する感想や修辞に富んだ四季時候の挨拶であり、後半部で主用件たる女子一生の心得についての問答が展開されている。その教訓はまず蘭の新年状から始まる。すなわち、奉公に忙しく十分な学問もしていないので(もちろん謙遜である)、五常の道、人の道、つまり「君につかへ、父母につかうまつるへきやうす」をぜひご教示願いたいという問いである。それに対する妙智の返事(2月状)は、「あなたの強い探求心を黙って見過ごすわけにはいきませんから、私がよく耳にしてきた心得をお伝えしましょう」と述べて、『列女伝』『礼記(内則)』によりながら「胎教」の大切さを説いている。それに続く3月状は、蘭が綾小路住の女性宛てに書いたものであるから、ここで問答の相手が変わっているわけである。にもかかわらず、手紙の文面は「先日のお手紙で胎教をお示し下さり…」という感謝の言葉から始まっている。胎教を説いたのは綾小路の女性ではなく、錦小路の妙智である。登場人物の身分差に注意を払う一方で、差出人と文面との関係に生じた矛盾を無視し、一連の教訓が展開していくことを優先するわけである。そしてこの3月状では、仁・義・礼・智の性は万民に生まれつき備わっているが、人の気質によって善または不善となって現れること、それは気を付けて育てないと花がよく咲かないのと同じであることなどを述べて、引き続き教示を求めている。それに対する綾小路方の女性の返事には、9歳までの男女の教育法について、次のように具体的に説かれている。

①まず右手を使うことを教える。

②話ができるようになったら、返事の仕方を教える。男子は早く返事をさせ、女子は緩やかに返事をさせる。また男女で帯の種類を変える。

③6歳から物の数と四方を教える。

④7歳から男女の席を別々にする。また同じ食器で食べさせない。

⑤8歳から門戸の出入り、座付き、食礼などの礼儀作法を教える。

⑥9歳からは月日の数え方を教える。

そして、10歳以降は男女別の教育が必要なことを述べ、まず、10歳から70歳までの男子一生のあらましを説くのである。それでは10歳以降の女子教育はどうなるのかというと、再び蘭から綾小路の女性に宛てた手紙で、今度は蘭が「ある人から聞いた話」として紹介している。やや強引な展開だが、これも教訓内容の連続性、ストーリー性を重んじた結果である。こうして、10歳から20歳の嫁入りまでの女性心得を略述した後で、孟子の教えを引き、人の人たる<sup>ゆえん</sup>所以が五倫の道にあること、人間が本来備えている善性を導き出すためにこの教えがあることなどを確認するのである。

以下、同様の問答が続くが、このように『女学仮名往来』は、蘭という女性が3人の女性から教えを請い、時には自身が語りながら、『列女伝』『礼記』『小学』『孝経』等に見られる胎教、男女別の随年教法、六徳(智・仁・聖・義・忠・和)、八刑(不孝、夫または妻の親類との疎遠、兄への不敬、友への欺瞞、他人の不孝への不仁、空言、惑乱)、五倫、孝行、夫婦の道、女子三従、七去・三不去、長幼、朋友といった諸教訓を説き明かすのである。そして、その根本は人間生得の「良知・善心」の発現にほかならないことを随所で強調している。

◆従って、訓話の展開だけを重視するなら2人の手紙で事足りるわけである。それをあえて蘭を含む4人の間でのやりとりにしたのは、教訓内容とともに、書簡作法の一端をも教えようとしたためであろう。女子一生の心得を12カ月の女文に分割して相互の脈絡を保ちつつ、しかも、身分や年齢の異なる4人の女性を想定してその上下関係に即した書簡作法をも踏まえようとした本書の試みは、単に教訓を主内容とする女筆手本類の早い例であるばかりでなく、独自の手法として評価できるであろう。

また、本書を繰り返し手習いし、繰り返し読み返していくうちに、いつの間にか蘭と自分を同一視してしまうという状況が生じたであろう。これは12通の消息文が前後で連鎖し合って一つの筋書を生み出すことで初めて可能な効果であり、せいぜい往復文の関連性しかない通常の用文章では起こり得ない。もし、このような目論見をもって本書を著したとすれば、一層興味深いことと言えよう。

# ○貞享4年(1687)板『女今川』・元禄13年(1700)板『女今川(新女今川)』

本書も教訓を主内容とする女筆手本の例である。この『女今川』は、近世～近代初頭にわたって女子用往来中最も普及したもので、大きく2つの系統があり、それぞれ内容が若干異なる。しかし、両者を混同する者は少なくない。それもそのはずで、『国書総目録』『国書人名辞典』、その他の人名辞典でもほとんどが『女今川』を沢田吉作に限定する誤りを犯している。『女今川』には、作者不明で窪田つな書(孫)の女筆手本である「貞享4年板系統」と、この貞享板を沢田吉が改編し、菱川師宣が挿絵を加えた絵入りの女筆手本である「元禄13年板系統(新女今川)」の2つがある。それぞれ非常によく普及し、両系統で合計250種以上というおびただしい板種と、20種近くの改編版(異本)を生んだ。両系統ともほぼ同趣旨の全23力条の箇条書きと後文から構成される女子教訓で、箇条は女性がこうあってはならないという禁止項目の列挙であり、家庭における女性の日常の心得を、親や舅、姑、夫、その他家内の構成員(下僕等)、親類、友人、他人、特に僧侶や夫以外の男性との関係の中で説く点もほぼ同様である。

## ◆貞享板には序文はなく、筆者・窪田つなの跋文がある。

此『女今川』、都にはよろしき女筆あまたおはしますへければ、其憚おほかれと、いなみがたき仰により写し参らせ侍るのみ。江州大津住窪田宗保 孫つな筆

わざわざ大津の片田舎に住む私が書かなくとも、京には能書が大勢いるのにとの謙遜の言葉だが、この文からは作者も特定できないし、作意も分からない。

## ◆元禄板の序文には次のように改編の趣旨が明快である。

此比有人の書し『女今川』をみるに、むかし貞世朝臣のしるしをかれし筆のすさみになぞらへて、まのあたりいましめの品々を顕せり。其ことむべなるかな。しはしも是にはなれては、あふむの物いひ、猩々の能ことをのぶるにおなじと心にせまりて、いとつかしく覚え侍る。よくあぢはひて是によらは、きのふのひがめるを改、今日はすなほなる道に趣へし。然るに、今また改かふる事は、全我言をよしとするにあらず。自かたましき所をひそかにしして、朝な夕なに見たらむは、聊心さしの直をあげ、まかれるをおくのたすけにとおもふのみ。誰々もたえず心にかへり見勤は、夫婦の道むつましく、縦はあめつちのをだやかに四季の各時をうるにかなひ、家とのほり、身おさまり、ほまれは四方にみちて、なかく子孫に残るへし。錦のしとね、つちくれの枕、賁賤の品は異にして、つしむの所、なんぞことならんや。

## 沢田氏の女 きち自序

◆この序文からすると、やはり貞享板の作者については沢田吉も知らなかったようである。吉は貞享板『女今川』を読んで反省するところがあり、さらにこの『女今川』に手を加えて自らの亀鑑とした。それが元禄板『新女今川』であった。貞享板『女今川』はそのままでも、曲がった心を改め素直な人間になるためのよい教訓であるが、自分のねじけた個性を条々に書き出すことで自己を振り返るよすがのためにあえて改編したのであった。貞享板の首題「今川になぞらへて女いましめの条々」をわざわざ「自を戒む制詞の条々」と改めたところにも、そんな彼女の意図がよく示されている。従って、両系統を比較すれば、沢田吉が強調したかった点が明らかになるであろう。そこで、23力条と後文のうち、特に両系統で異なる箇所を対比させてみた。( )内は箇条の順を示し、元禄板における変更点を対照させた。貞享板と共通する文言も多いが、元禄13年板では意図的な改編が目立つ箇所も少なくない。まずは両者の違いを一覧にしてみよう。

■『女今川』の二つの系統

	貞享4年板	元禄13年板
作者・筆者	作者不明。窪田つな書・跋。	沢田吉作・書・序。菱川師宣画。
刊年・板元	貞享4年6月刊。[京都か]福森三郎兵衛板。	元禄13年1月刊。[江戸]板木屋新助ほか刊。
外題・首題	外題『女今川』。 首題『今川になぞらへ女いましめの条々』。	外題『新女今川』。 首題『自を戒む制詞の条々』。
冊数・所蔵	大本2巻2冊。 初板本は小泉・東京国立博物館のみ。	大本2巻2冊。 初板本は東京国立博物館・東京芸術大学・内閣文庫等に所蔵。
本文冒頭	第1条「常の心さし無嗜にして女の道不明事」	第1条「常の心さしかだましく女のみち不明事」

箇条	貞享板	元禄板における変更点
一	常の心ざし無 噲にして女の道不 明 事	「無噲」を「かだましく」に変更
三	小事をも 愚 にして 考 なく何かと誹謗する事	「少 さまあやまちとて不 改、敗れに 至 て人を 恨 事」(全文変更)
五	主・親の深き恩を 忘 て忠 孝 疎 になる事	「主・親」を「父母」に、「忠孝」を「孝の道」に変更
六	夫をかるしめ 驕 にちやうし、天道を不 恐 事	「驕にちやうし」を「我を立て」に変更
一四	貴 も 賤 も世のはかなき事を不 弁 、氣随を 好 事	「世のはかなき事」を「其 々の法有 事」に変更
一五	人の非を見るを以て我知有と 思 ふ事	「非を見る」を「非をあげそりて」に、「我知有と思ふ」を「我に智有とみする」に変更
一六	出家・沙門を 貴 むといふとも、側近くなる事	「貴む」を「対 面す」に変更
二一	男 たるには 縦 親 類・縁者といふとも、親 みすぐる事	「親類・縁者」を「まぢかき親 類」に変更
二二	我に 勝 れるを嫌ひ、己 に 随 者を愛 する事	「我に勝れる」を「道を守れるひと」に、「己に随者」を「我にへつらふ友」に変更
二三	人来る時、其 客 に対しいかりをうつし無礼の事	「其客に対し」を「我不機嫌に任せ」に変更
後文	<p>女のみち 静 に見だりがはしくなく  先家を守るべきには、第一慈悲 深 く正しく心懸へし。</p> <p>夫 を天のごとくやまひ、つしむべし。  地は天の 恵 をうけて万物を生 ずるにより、夫を 貴 むは、  是みな女の孝 行の道也。仁・義・礼・智・信の五 常、何れも人の  行 へきみちなれども、取 分 守るべきは仁の道なり。  されは、幼 なきよりやさしき友に 交 り、仮 初にも 猥 がは  しき友には近 寄べからず。</p> <p>ゆへに、家を能たもつ女は、正しき事を 好 み、家を 猥 にす  る女はゑならずあやしき事を好むよし、  女は家のうちを守る事なれば、先、其身の行 儀作法正しくし  て、家内の者化して 和 き、一族のしたしむは正しき 行 なる  に、我身の 行 ひよこしまにして、召 仕 の者よろしからざるを  せむるは僻事なるへし。</p> <p>或 は善 人と成、或は悪人となりてかはる事、みな幼 少より  の 教 によるへし。</p> <p>ことに男子には師を取、学 問をつとめさせ、身を 治 る道を  ならはしむるも有といへども、女子にはをしゆる人希也。</p> <p>然者、兼てよめたる道を 教 なくしては、夫 の心に 背 て一  門の恥をなさん事、いかばかり物うかるへし。</p> <p>況 や家を 治 るには朝 夕の 噲 あつく、言葉すくなく正し  ければ、縦 まづしきといふとも 嘲 なし。猥 にはしたなく、つ  たなければ、富るといふとも心ざし有人には疎まれ、はづかし  めらるへし。</p> <p>怒じて、人の善 悪を知給ふべきには、其人の愛 する友を見て  知るへし。我に勝れる友を好み、己にをとれる友を不 好 は、  貞 女の心ざし也。但、かくいへばとて、人をゑらむべからず。是  は悪き友を近づくる事なかれといふ也。貴 き賤しきに不  限、衆 人愛 敬なくしては 万 調 がたし。</p> <p>我心の善悪をためし知らんと思は、諸 人出入の時 是善と思  ふへし。又、招 くとみ疎み昔 信なき時は、我 行 ひたゞしから  ずと知るへし。</p> <p>唯浮世の中にすむも 濁 るも心の淵の水のながれにこそと  思ひ 廻 すへし。</p> <p>少 も心に油断せしめて、世間の 嘲 を得る事、誠 偏 に  口惜かるべき次第也。能々つしむへし、噲 むべし。誠 かく  のことし。</p>	<p>(削除)</p> <p>「先家を守るへきには、 志 すなほにして、毎事我を立て、おつとの  心に 随 べし。」  「夫 を天のごとくやまひたつとふは、是 則、天地のみち也。」  (削除)</p> <p>「されは、幼 なきより心 ばへやさしく、すなほなる友にまじはり、かり  そめにも 猥 かはしく、いやしき友に近 寄べからず。」  「家を能たもつ 女 は、正しくすなほなる事を好み、家をみたす女は、  かだましく氣随なる事を 好 のよし、」  (削除)</p> <p>「教」を「 習 」に変更</p> <p>「学問をつとめさせ」を削除。また「女子にはをしゆる人希也」を「女子  としてはまなぶ者希 也」に変更。さらに「此 故に女の法有 事をし  ず、かだましく、邪 に成ゆく事、誠 口惜き次第也」を追加。  「朝な夕な孝 行を尽して、毎事父母の心に 順 なる事、第一の事  也。面 に白 粉をかさり、髪 形をつくろふ事をのみたしなみとおも  ひ、かりにも心のゆかみをためむとする者希 也。」(全面変更)  「心 ざしすなほにして、むさぼりなくは、たとひまづしくおとろへたり  共、恥ならず。猥 がはしく 邪 なれば、富るといふ共、智 有人には  うとまれ、はづかしめらるべし。」(全面変更)  「愛を以て、人の善悪をしりたまふべきには其人のしたしむ 輩 を見  てうかゞひ知といふ事あれば、まことにはづかしき事也。」(文章の位  置を移動したうえ全面変更)</p> <p>「怒じて、我 善悪を知らんと思は、夫の心はへ温 和にしてせまらず  は、わか 行 善とおもふべし。せはしく短慮にあらは、我心ざしの  正しからざるゆへとしるへし。」(全面変更)  「人を召 仕ふ事、日 月の草木、国土をてらし給ふがごとく、朝 夕心  をめぐらし、其人々に 随 て召仕ふべき事也。」(追加)  (削除)</p> <p>(削除)</p>



◆元禄板『新女今川』が説く教訓は貞享板とほぼ同傾向だが、後文については改編の跡が著しく、具体的な文言では「心かだまし(奸し・姦し)」と「心すなほ」の強調が目立つ。本書を自戒の書とした吉の理想は、「かだまし」くない、「すなほ」な心映えの女性であったと思われる。また、貞享板の後文のうち、天地の道や五常を説いた抽象的な表現や下僕・他人との対人関係の心得を割愛する一方、第5条では「主・親の深き恩」を「父母の深き恩」と言い換え、「忠孝」の代わりに「孝の道」としている。従って、元禄板『新女今川』は、孝・貞の見地から己の心の善悪を内省することを特に重んじているのが分かる。

- 
- \*1 『日本国語大辞典』(昭和五六年 小学館)第八巻「女筆」項に「女の筆跡。女流の筆法。おんなで。じょひつ」とある。
- \*2 小松茂美『展望日本書道史』(昭和六一年 中央公論社)三六〇頁。
- \*3 初刊は明和七年(一七七〇)である。
- \*4 宝暦十一年(一七八一)刊。巻末「刊行一覧」参照。
- \*5 江戸中期刊。巻末「刊行一覧」参照。
- \*6 このほか広告以外の例として、元禄五年(一七〇二)刊『浅香山』は明らかに男性書家の筆であるが、『宝永六年書目』等に「女筆手本」とある。また、明和七年(一七七〇)板『さしもぐさ』(戸田正栄筆)も『江戸本屋仲間記録』中に「女筆さしもぐさ」と記されているが原本の書名(題簽)には「女筆」の字はない。
- \*7 巻末「女筆解題」の「男筆女用手本」項参照。
- \*8 本書は居初津奈の作であるが、詳細は第四章を参照。
- \*9 杉本つとむ『江戸の女ことば』(昭和六〇年 創拓社)一七八・一八三頁。
- \*10 生没年等は『日本書流全史』(小松茂美著 昭和四五年 講談社)上巻六三四頁や『国書人名辞典』(平成五～一〇年 岩波書店)などによった。
- \*11 『新燕石十種』第七巻(森銑三ほか監修 昭和五七年 中央公論社)二七二頁。
- \*12 ここでは『日本書流全史』上巻六六七頁以降の「江戸時代和様書流一覧」によった。ただし女性人数は筆者の計算である。なお本書は森銑三・中島理壽編著『近世人名録集成』(昭和五一～五三年 勉誠社)第四巻にも影印収録されている。
- \*13 前掲『日本書流全史』上巻六四九頁。
- \*14 この「めて度かしく」は明らかに主文に続いて記されてあるが、追伸文(ここでは「なを〜」以降の一文)を含む手紙文全体の書止語とも考えられるため、主文末尾で「」書きに示したうえ、追伸文末尾に置いた。
- \*15 本例文のように本文末尾を示す記号としての「かしく」の場合は、本文中に「」書きに示すことにする。
- \*16 本文中の注記(ここでは単に漢字表記を示すのみ)は、このように「」書きで示すことにする。
- \*17 ここでの改行は原文通りである。次に来る「御所様」に対する強い敬意の表現である。
- \*18 返す書き、追而書き、猶々書きとも。また、追伸文を伴う手紙は一般に同輩以下に用いるものとされた。また、重ね言葉が嫌われる婚礼祝儀状には追伸文もタブーとされたが、それ以外の慶事には重ね言葉とともに追伸文が奨励された。
- \*19 ただし、女筆手本の例文にはほとんど「様」が使われているから、特に身分の違いを示す必要に応じて用いられたものであろう。
- \*20 本表は筆者が作成したが、俗文・雅文等の違いについては、橘豊『書簡作法の研究・続編』(昭和六〇年 風間書房)一三九頁以降を参考にした。
- \*21 「散らし書き」に対して、行頭・行末を揃える縦書きの文章を当時は「並べ書き」と言った(今日「延べ書き」と呼ぶこともある)。女性から男性宛の手紙や、散らし書きが不向きな女児宛の手紙、また、用件中心の実用的な手紙には「並べ書き」が基本とされた。
- \*22 全五七通のうち並べ書きが二九通、散らし書きが二八通と両者相半ばする。
- \*23 本書中・下巻は一般的な女文で、㊦に属する。
- \*24 本書上・中巻は一般的な女文で、㊦に属する。
- \*25 『女今川』には、作者不明・窪田つな書の貞享四年板系統と、それを改編した沢田吉作・書の元禄一三年板系統の二種ある。
- \*26 石川謙の往来物分類を全く問題なしとするものではないが、往来物分類は本書の中心的課題ではないので、一応石川謙の分類に従っておく。ただし㊦古典に該当する分野は同分類にはないので、独立した一分野とした。
- \*27 強いてあげれば産業科は「女商売往来」(『女寺子調法記』所収)くらいであり、歴史科についても『女古状揃』『女古状揃園生竹』『貞女志満津文』など数点を数えるのみである。また語彙科に相当する準往来物として『女節用集文字袋家宝大成』がある。
- \*28 ただし弘前本には中巻末尾に一丁分の落丁があるため、厳密には『女世話文章』の完本は現存しない。また、下巻のみなら東京家政大学にも架蔵する。
- \*29 作者は『女重宝記』で知られる苗村丈伯である。
- \*30 中野節子『考える女たち——仮名草子から「女大学」』(平成九年 大空社)二一三頁。
- \*31 前掲『考える女たち』二一四頁。
- \*32 文中に使用する世話字には共通する語彙が少なくない。
- \*33 この点で、本書は「地理」型の要素も含むものであるし、次の四月状は「教訓」型に相当する。
- \*34 女用文章でも語注を付すものは少ないが、女筆手本ではさらに稀である。
- \*35 本書目には、『女初学文章』『女庭訓』とも、板元名に「丸や源」と記す。
- \*36 天明六年(一七八六)から刊行を開始し、四一年を経て文政二年(一八一九)に完了した『群書類従』の板木一万七二四四枚は、ほぼ完全な形で温故学会に現存するが、『群書類従』の場合、板木の彫刻料は漢字あるいは平仮名一字につきいくらかと詳細に決められていたという(温故学会・斎藤幸一氏のご教示による)。江戸前期にこれほど細かい規定があって書籍の価格に反映されていた否かは不明だが、少なくとも、丁数とその彫刻内容の双方から価格が設定されていたことは確実であろう。
- \*37 前掲『近世人名録集成』三巻一六三頁。また同書第四巻九頁と三一〇頁にも若干の記事を載せる。
- \*38 現存唯一の謙堂文庫本では、下巻末尾の裏表紙見返に宛名や脇付が記されていたのが欠けてしまった可能性もある。
- \*39 置散子作『四季仮名往来』では各月往復の二四通の消息文を載せるが、こちらは全て「五もじ様」、すなわち少女と、「綾小路」辺の女性とのやりとりである。いずれにしても、『女学仮名往来』と『四季仮名往来』との密接な関連を想起させる。
- \*40 敬意を示すために宛名の上に書かれる「進上」「謹々上」「謹上」などの言葉で、このうち「進上」は最高の敬意を示すものだった。例えば、室町初期『書札作法抄』(『群書類従』九輯六二二頁 平成四年 続群書類従完成会)の冒頭では「一畏言上恐惶謹言進上ナド書事ハ。主君師匠親父二書也。但主君ノ兄弟伯父小師等二モ書ドモ。ソレハ少行草ガカリテ書也」とあり、楷書体の「進上」を最高位の相手に用いることを述べている。また、室町初期の『今川了俊書札礼』(『続群書類従』二四輯下四五六頁 昭和六〇年 続群書類従完成会)には、敬う相手の名字の上に「進上」を書き、脇付を「謹上人々御中」とすることが記されており、また一般に「進上」を用いる手紙の書止は「恐惶謹言」「謹上」の手紙のそれには「恐々謹言」「恐惶謹言よりも下位)を用いることを記す。なお近世初期の女性書札礼では、『をむなかへ見』や『女式目』に最高位の相手に書く披露文に「しん上」を用いているが、書札礼の普及に伴い一般に「進上」書きは行われなくなったようである。